

## 山海塾「かがみの隠喩の彼方へーかげみ」 天児牛大氏会見レポート

※以下の内容は、[2014年2月16日（日）](#)に北九州芸術劇場にて行われた会見のレポートを再掲したものです。



日本が世界に誇る舞台芸術の発信として、劇場開館初年度より上演を続けてきた舞踏カンパニー・山海塾による公演。今年、初年度に上演した「かがみの隠喩の彼方へーかげみ」が10年の時を経て再び登場します。フランス・パリ市立劇場での初演時、その透徹した美しさで満席の観客たちを陶酔させた話題作であり、北九州芸術劇場への初登場演目となった記念すべき本作について山海塾主宰・天児牛大氏にお話頂きました。

### ◆「かげみ」2000年初演とその後、九州への思い。

この作品は、2000年にパリで発表してそのまま各地を回りまして、一番最後に上演したのは11年のギリシャでした。今回劇場が10周年という事で、「最初に北九州で上演した作品はどうか？」という事でお話を頂いて。そしたらちょうど同じ時期に、シンガポールの方からもお話を頂いて、2月にこちらで上演した後、5月にシンガポールのフェスティバルにもこの作品を持っていきます。

余談になりますが、70年代後半、まだ我々が名もないカンパニーで、山海塾という事もあまり知られていない頃に飯塚の嘉穂劇場で公演をやっているんです。こちらの友人や初めて会う方が実行上演委員会を作ってくださいって、「金柑少年」という作品を上演しました。それ以外にも、当時国内キャラバンと銘打って回っていた中で熊本の方の大学の学園祭に出させて貰ったり。それが、ヨーロッパに出る前の活動として強く残っていて、我々が九州の方に強い思いを抱くきっかけでもありました。それでその後色々な経緯の中から今日まで、北九州芸術劇場と共同プロデュースという形で作品を続けて来られました。



### ◆蓮の葉の着想。「かげみ」＝影を見るという自己確認。

一度出した作品は基本的に変える事はしませんので、前回と今回と、踊り手は多少入替えがありましたけれど、構成あるいは演出は基本的に変えていません。それをするとう作品がグチャグチャになるし、いじりたくなった部分は、新作の方に反映する形で今までもやってきていますね。

この作品の舞台美術に顕著に見えるのは、“蓮の葉”です。私の友人で、もうお亡くなりになりましたが、古流松應会の千代の家元・千羽理芳さんという方が、私の友人の舞踊の会に献花という形で、実際の蓮の葉を天井に貼ったんですね。生け花の方ですからやる事が大胆で、田んぼを一反買い取って天井に貼って、その下を観客が通るといふ。これが70年代後半の事で、それから「かげみ」の初演が2000年ですから30年近く経っている中でしたが、自分の中でその記憶がとても強くて、千羽先生に「蓮の花やろうと思うんだけど」と言ったら、どうぞどうぞと仰って頂いて。それが言わば最初のインプレッションでした。

もちろん生け花のように一反買って…とはいかないですから、蓮の葉を大きくデフォルメして、表現としては強化プラスチックを和紙でくるんで白い状態にしたものを、100本近く吊って舞台美術にしました。最初は、茎が床面に接して蓮の面が見える状態、それが天井の方にゆっくり上昇して、最後にまた降りてくるという。蓮の葉自体は水平面を指示し、それが上昇する事によって逆に水中世界であったり、その内側とかいった事になる訳で、それが今回の作品「かげみ」のひとつの意図でもあり、そのようなイメージを作品として立ち上げました。

「かげみ」というのは“影を見る”という事で、影を見る事自体が自己確認と言いますか、一部では“鏡”の語源でもあると言われていています。鏡と言うのは水鏡が始まりで、水平のものを覗くところから始まり、そこから今度は垂直に立ちあがった状態となった。我々もまた一日に一回寝て、そこから立つという状態がありますね。そういう意味で、鏡の水平から垂直と、身体の持っている水平から垂直という事で「かがみの隠喩の彼方へー」というタイトルになりました。



#### ◆ファーストインプレッションの衝撃を独自の世界へ。蓮というシンボル。

「金柑少年」という作品では、パネルに実際のマグロの尻尾を1200匹ほど貼り付けて使ったんです。やはり実物というのは持っている力が違いますから。ですが、生花は実際のものを使う事は不可能ですから、どの位の大きさにデフォルメするか、色を何にするかと考えまして。それで実際の、言わばグリーンとかそういったものにするると具体性を指し示すので、白にしたんです。我々はやはり白塗りですし、舞台そのものはモノトーンに持っていきたいとも考えまして。面白い事に、ちょうど同じ時期に蜷川幸雄さんも舞台で蓮を使ったんですが、蜷川さんの方は割とリアルなグリーンで、「やられた！」なんて言っていましたね。

蓮の葉は日本では宗教的なイメージも強いですが、エジプトなんかでは非常にシンボリックなんですね。こちらは蓮の“葉”というよりも“花と実”ですが、それは多産であるとか、沢山のものがそこに内包しているという意味では、共通するシンボルだと思います。スペインの方に行くとザクロが多産、あるいは豊穡という意味でのシンボルになっていたりして、そういうシンボリズムというのは、意外と共通しているんじゃないかなと思います。本来蓮は、澄んだ水ではなく濁った水からあぁいった白い花が咲くんです。そういう在り方も、シンボリズムとして結びついていく理由になったんじゃないかなと思いますね。

#### ◆シンボリズムからみる普遍性。山海塾がテーマとするもの。

ひとつのシンボル、あるいは隠喩と言うのは、日本に限らず共通する物事かなと思うんですね。例えば、今は情報社会じゃないですか。色んな形で情報が飛び交っている訳ですけど、プレヒストリーというか、そういう時代には、人が自然と向き合っていて、そういう中から産み落とされた神話であったり、あるいはシンボリズムというのは、意外と共通しているんです。それは、お互いの地域と連絡を取り合っていて共通のものを生みだし

た訳じゃなくて、それぞれが対象となるものと交感する、あるいはダイアログする事によって産み出されている—というのがあるんだと思うんですね。

ヨーロッパに出た時に、日本人のカンパニーで当然文化としては日本の文化で育っている訳ですが、それだけじゃなくて、人として共通するもの—そういった事が作品を創っていくうえでとても後押しする要因になりました。今でもその傾向はあまり変わってなくて、極力やはり共通する物事の方にテーマを持っていければと思っています。そういう意味では、作品のバリエーションはあまり変わらないんですよ。バリエーションを狙っている訳ではなくて、共通するベースを違った角度から眺める中で、切り口として新作が成立しているんだと思いますし、今後も同じような方向性と思考で続けていければと思っています。



#### ◆舞踏手の見つめる先—観客は闇。

観客の反応というのはやはり民族性が表れるもので、ワーンと反応する民族の人と、じっくり受取る人とがいます。僕が考える劇場というのは三つの原則があって、照明を落とすと闇になる。なお且つ天候に左右されない。それともう一つは、外部の音を遮断する。この要素が世界の劇場—屋内にある劇場では、建築的にも全く一緒なんですね。

我々の舞台は、作品を言葉でお客さんと介在する形ではありません。作品に対する集中があり、どこの国に行っても、その集中というものをメインにして、その中に自分の感情や設定を乗せ、作品自体の持つ変容変化に対して集中していく。あえて言うと、観客席というのは我々から見ると闇なんです。どこの国に行ってもそれが変わる事はなく、同じピンポイントに向かって集中し、それをお客さんはある種の正面性として受け止め、そういう“集中”を見て貰うという事になる訳です。

ただこれが、野外の劇場になると変わるんです。星があつたり月があつたり。そういう時は、割と踊り手自身もそういうものを自然に受け止める。ヨーロッパ含め地中海世界にある、今も使われている古代ローマの劇場では、夏場になると北から南の方へと夏のオープンフェスティバルが続いていくんですね。最近は天候不順もありますが、地中海はやはり雨が降らないので野外での公演に向いていて。それで、我々も随分野外でもやらせて貰ってますけども、やはり野外は野外で味がありますね。

この1月にはワールドツアー待望の45カ国目としてインド公演を成功させ、北九州での公演後はシンガポール、そして再びフランスでのツアーと、ワールドワイドに躍進を続ける山海塾。来年は、なんと設立40年の節目の年でもあります。自分自身や万物の、変わらないものと変わるものに気づかせてくれる貴重な機会、そして、悠久の美しさを秘めた山海塾のステージを、今年もどうぞお楽しみに！

舞台写真：(C)Jacques Denarnaud